

今回のベルリンにおける在外研究の課題は、1920年代から1930年代にかけての二十世紀の戦間期のベルリンの生が、急速な都市化とともにどのような相貌を獲得し、文学はそれをどのように捉えているかを分析、考察することであった。ベルリンの国立図書館および州立図書館にて、日本国内ではアクセスが困難な資料の調査を行うことができたこと、研究の受け入れ先となっていたいただいたジーベンハール教授（ベルリン自由大学）と、ベルリン文学研究の現在の状況についての情報・意見交換できたことは、本研究課題の遂行に大いに資するものだった。

在外研究中の大きな研究成果としては、二十世紀の初頭のベルリンをよく知る作家・翻訳家のフランツ・ヘッセル（1880-1941）による都市エッセイ『ベルリン散歩』（1929）の翻訳出版に向けて、その訳稿を仕上げたことが挙げられる。私はこれまで、二十世紀のドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）を主たる研究対象としてきたが、ヘッセルは、ベンヤミンと共同で十九世紀パリの研究やプルースト翻訳を行っていたことのある、ベンヤミンに都市の見方を教えた人物である。ベンヤミンは近代都市における人間の知覚のあり方の変化を追求すると同時に、都市を未だ書かれていない歴史を宿す場として捉え、都市から歴史を読みとり、それを叙述しようと試みていた。とくに、みずからの故郷であるベルリンについては、都市記述を自身の幼年時代の追想と重ね合わせたエッセイ（『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』等）を著しているが、そのお手本となったのが、ヘッセルの『ベルリン散歩』である。ベンヤミンはヘッセルを街歩きの師匠として、尊敬の念をこめて「遊歩者」と呼んだが、本作品はその面目躍如たるものである。

本作品は、ベルリン案内という体裁をもつ、ヘッセルの著作のなかで最も読まれている作品であるが、実際には、観光者向けの都市案内というよりは、「遊歩者」という、ゆっくりとした足取りで特に目的もなく街をうろつく者が、ベルリンという都市の細部に目を向け、ときにその細部に宿る歴史をさかのぼりつつ夢想し、時間をかけてベルリンという都市をじっくりと「読む」ことによって浮かび上がるイメージを捉えた作品であり、都市記述のひとつのあり方を示している。ヘッセルはその死後の名声をベンヤミンに負うところが大きい。本書を読むと、都市を現在と歴史との二重写しで見する方法（都市のなかに神話的な形象や、文学の断片を見出す方法）や、ベルリンという都市について注目すべき点など、ベンヤミンこそがヘッセルに多くを負っていることが明らかになる。

ヘッセルの都市記述に登場する語り手の「わたし」は、みずからの周囲の人物や事物を「観察者」として、距離を置いた視点から眺めているのが特徴的であり、当時のベルリンをめぐる女性、ナイトライフ、労働、地域といったテーマが、機知に富んだ批判精神をもって扱われている。1920年代末のベルリンは、ヴァイマル共和政が安定期を迎えていたものの、急激な近代化によるひずみや、共産主義者と国民社会主義者の対立も始まりつつあった時期であるが、そうした激しい時代の都市を、ヘッセルは、非常にニュートラルな、いかなる暴力性をも含まない立場から記述している。ヘッセルは死後しばらくのあいだ忘却されていたが、1990年頃から再評価が始まり、1999年には Igel 社から著作集（全五巻）が出版さ

れ、2013年にはその改訂版も出ている。

具体的な建物や人物や催し物等に関する記述が多く登場するが、それらについて現地の図書館で詳細に調査することができたため、しっかりとした裏付けのある訳稿が完成した。なお、この翻訳は刊行予定であり、すでに出版社との合意のもとに進められているものである。

さらに、近代以降のベルリン文学は、いまだ未発掘や研究が着手されていない作家や作品も多いなか、ジーベンハール氏との研究交流により、注目すべき作家を幾人かピックアップすることができ、ヘルマン・ケステン（1900-1996）のベルリン小説や、ヴィルヘルム・シュパイアー（1887-1956）の作品についての読解を進めた。黄金の時代とも呼ばれたベルリンの1920年代は、どの角度から見るかによって、その相貌が異なる。「新しい時代」としてもはやされたこの時代は、第一次世界大戦をどう意味づけるべきかが大きな問題となっていたものの、その問題が放置されていた時代でもあった。「出口のなさ」を描いた作品に注目することによって、この時代を包括的に捉えることができると思われる。今後、これらの作品についての論考を刊行したいと考えている。

また、このたびの在外研究期間中には、明治大学の人文科学研究所の総合研究（2018-2021年度）の研究成果として、論考「戦間期ベルリンのメールヒェン——ユーリウス・ベルストル『ベルリン・シュレーゲン駅』に描かれた暴力」を執筆し提出した（論集として2023年度中に刊行予定）。本論考では、1930年初頭のベルリン文学を扱い、華やかな都市文化と表裏一体になった「食べ物と住む場所を得ることの困難さ」をベルストルがメールヒェンという形式によって描き出していることを示し、ベルリンで生きるということは、安定した快適な住居に暮らすことではなく、街路へと身を投ずることを意味している、ということを通り出した。本作品もベルリンという都市に密着した描写が多いため、1929年から1930年にかけてのベルリンの政治的状況や社会状況について、現地で詳細に調査できたことが、執筆に大いに役に立った。

またさらに、明治大学の「国際共同研究プロジェクトII型」（2021年度）の研究成果として、「歌に抗う一辺見庸『1★9★3★7（イクミナ）』における「孤独に自身に問う」姿勢について」（『文芸研究』問う）姿勢について」（『文芸研究』150号所収、2023）の執筆も行った。日本の第二次世界大戦における戦争加害をどう捉えるべきか、というテーマを扱った国際シンポジウムを踏まえたうえでの論考である。本論考では、歌を唱和するという行為において、個人の身体が国家という大規模な身体へとからめとられてゆく過程を考察したが、その際には、現在のドイツ国歌成立の経緯や、ドイツで行われた「戦争と音楽」をテーマにしたイベントも参照しつつ論じた。これも、在外研究中で、ドイツ関連の文献へのアクセスが非常にしやすかったことによる成果である。

今後は、二十世紀の戦間期におけるベルリン文学の研究を続ける予定である。第一次大戦後にヴァイマル共和政が成立したドイツの首都ベルリンは、市民に代わって大衆が文化の担い手となり、職業をもち自立した「新しい女性」の誕生や性の自由化、表現としての消

費活動の活発化、ダンス熱に浮かされたナイトライフなど、都市文化の勃興が見られ、また政治的には第二次大戦開戦にかけて共産主義者とナチス支持者の対立が激化する、激しく生がほとばしる街となっていた。この時代のベルリンの文化的営みや生活スタイルは通例「アヴァンギャルド」あるいは「モデルネ」という術語で把握されるが、そのような「新しさ」が、その背景にあったいまだ消化されていない十九世紀ブルジョワ的な文化と第一次大戦の経験、および貧困の問題と結び付けて考察されることはまだ少ない。今後は、ベルリンという都市がもつ地方的な特殊性を明らかにしつつ、二十世紀初頭の「モダン」なベルリン文化が、ブルジョワ文化および第一次大戦の経験をどのように消化したのか、あるいはしなかったのか、を考察することにより、最終的には、自由で都市的な大衆文化を経験したベルリンを首都にもつドイツが、なぜナチスのもとで第二次大戦へと向かわざるをえなかったのか、ベルリンの前衛的な文化や生のどこに暴力への指向性が宿っていたのか、という問いに答えることを目指したい。その際に、在外研究中に集中的に取り組んだヘッセルの都市論は、ハンス・オストヴァルト（1873-1840 年）の都市論とともに、分析対象の両輪となる。

ベルリン文学研究の成果は、ドイツ文学専攻の専門の授業において、大いに生かすことができると思われる。ベルリンという都市は、ヨーロッパの他の都市と比べて遅れて発展した街である。そうした街がどのように近代化してゆき、アイデンティティを確立していったのか、また、近代化の過程でどのような問題を抱え、それに対してどのように対処していったのか、について授業で議論することは、貧困、格差、異文化の共生といった、近代の問題の多くが未解決な現代においても、非常に重要なことだと考える。

また、在外研究中には、ドイツおよびヨーロッパの現在の情勢についても大いに情報収集することができた。とりわけ、現代美術展「ドクメンタ」をめぐる騒動やベルリンの国立博物館所蔵のベニン像の返還といった問題においては、芸術や文化が植民地問題をはじめとする政治問題と非常に密接にかかわっており、芸術とは何か、という問題は、つねに改めて考え直す必要があるものだという事を明らかにしている。また、気候変動や人権問題や歴史問題に若者たちがどのような活動でかかわっているのかについても多くの資料を得ることができた。社会の問題に対して芸術や文学は何ができるのか、という問題も、学生とともに議論してゆきたいと考えている。